
LIVING A PEN

ムテキング

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

LIVING A PEN

【著者名】

Ζ8517H

【作者名】

ムテキング

【あらすじ】

もし、歴史上の人物が現代に生き返ったらどうなるんだ。そんなことが出来るはずがない・・・・・・・・だがそれを可能にするペンがあつたとしたら、何かの間違いで手に入つたらどうする。実はそれを手にした男がいた。その男の物語である。

第一話

第1話 蘇生

「ああ、平凡だな」

男が呟いていた。その男の生活とは、朝起きて、学校に通つて、夕方帰ってきて、テレビ見て、風呂入つて寝る。休みに友達と遊んだり、これの繰り返しをしている。男の名前は、泉 佑樹。学生である。男は、疲れているので、ベッドに横になつて、眠りだした。

「…………」

すると、どこからともなく女の声が聞こえてきた。

「そのままでいいですか。貴方は、いまの生活に満足していますか」

「…………んっ」

泉は、まだ、意識が眠っている状態で答えた。

「…………いや」

「そうですか。では、貴方に力を与えましょう」

泉は、ぼんやりしながら、答えた。

「…………ああ」

「貴方には、人を生き返せるペンを置いときます。」

といい声が聞こえなくなつた。

それから、数時間後、泉は目を覚ました。泉は目を覚ました後、シャワーを浴びにいった。そして、部屋に戻つてくると、テレビをつけた。そのとき、速報で鉢巻 比呂紀という株式会社の社長が死去という文字が流れた。男は、何かを思い出した。机の上にペンがあるのに気づいた。泉は、さっそく、死んだ社長の名前を紙に書いてみた。それから、テレビを見ていた。

「何も、起こらないな。」

泉は、昨日のことは、夢だと確信した。ペンも母さんが机の上にお

いたのだろうと考えた。そして、テレビを消して、今日は日曜日なので、本でも買いに出かけた。デパートの本屋に向かっている途中、電気店の近くを通り、ニュースが流れていた。そのニュースの内容とは死んだはずの鉢他 比田紀社長が生き返ったという内容だった。泉は、そのニュースを見るなり、本屋に行かず、家に帰った。泉は驚愕していた。

「マジか、俺が生き返したのか、いや、たまたまなのかもしれない。」

部屋に戻つて、ペンを確認しようと想い、部屋の扉を開けた。

「よつ」

と翼のはえた女が泉の部屋にいた。

「・・・・・誰だ」

と少し戸惑つた後泉は女に向かつていった。

女は笑顔で答えた。

「君にペン（力）を『えたものといつておこつかな』泉は、考えていた。この女がこの力を与えてくれたのか。こいつは使えるなと泉は考えていた。そのとき女が話しかけて来た。

「驚かないね。君」

「いや、驚いているよ。だが、よく来てくれた。少し、聞きたいことがあるのでね。」

泉は、ペンの使い道のことを女に聞いた。それから、30分後・・・

「・・・なるほどね。簡単に言つと場所、名前、認識、時間、年齢をこのペンで書いたら、そのものが生き返るのだな。例えば、名前だけなら、他の項目はかつてに決まるんだな。」

「だいたい、そんな感じかな」

女はうなづいていた。

「それは、人間以外にも使えるのか。例えば恐竜とか」

泉は質問をした。

「たぶん、生物だつたら使えると思つよ」

女は感心していた。

「けど、よくそんな使い方を思いつくね。君人間でしょう。人間が絶滅するかもしれないよ。」

泉は笑つていた。

「はは、人生に退屈していたんだよ。ラッキーだつたな。面白いものが手に入つた」

女は泉に問いただした。

「ねえ。どうして君は、私の事や、どうして、自分が選ばれたとか聞かないの？」

泉は答えた。

「興味ないね。俺に今必要な情報は、いや、興味があるのは、このペンだけだ。例え、君の事を知つても、どうでもいいことだ。」

「そんなものかな——」

「そんなもんだ」

泉はペンで書き始めた。内容は、アメリカのニューヨーク、ティラノザウルスと。

「ティラノザウルスつてなに」

「恐竜さ。さてどうなるかな」

ニュースで、ニューヨークに恐竜が出現とパニックになつていた。男はそれを確認すると、満足そうにわらつていた。次に女に聞いてみた。

「おい、これは、生き返れる場所はどんな場所でもいいんだな」

「うん、そのペンで書いた所にいけるよ」

「わかった。次に生き返るときは、服とかも身に付けているんだな

「死んだときに着用していたものならいけると思うよ」

「そうか、わかった。」

泉は不敵な笑顔をしていた。

その日から泉の行動は一気に躍進した。

泉はペンの力を利用して、まず金を手に入れようとした。まず、外国のスイス銀行に講座を作った。そして、外国のサイトで、ホームページを開いた。もちろんすべて英語である。その行動を女は見ていた。

「おい、女、いつまで俺の回りにいるんだ」

女は空中に浮きながら答えた。

「気にしない、気にしない」

「わかった。」

泉はその後なにもしゃべらず、ホームページを完成させていた。女はそれは、なにをしているのかと聞いていた。

「何をしてるの」

泉は無視して、作業を進めていた。

「・・・・・・」

「ねえねえ、何してるの」

泉は無視して作業を進めている

女は泉の頭をもぐらたたきのハンマーで叩いた。

「ピロ、ピロ、ピロ」

女は叩きながら効果音を自分で出していた。

泉はだんだんと腹がたつてきてとうとう言い返した。

「おい、この女^{あま}さつきから何しやがる。気にしなくていいんだろ」

女はふて腐りながら、ベッドに転がっていた。

「うさぎはね、さみしくなると死ぬんだよ。それに私の名前はアメリカ。職業は悪魔

泉は言い返した。

「あつそ」

「冷たいなーー。その力なくそつかなーー。それでもいいのかなあ」

泉はこの女うざつてえなーーと思つていたがここは我慢と自分に言い聞かせた。

そして、一呼吸して、女に言った。

「わかつたよ、何が知りたいんだ」

「・・・女じゃないよアメトイナ。名前で呼んでくれなきゃその力なくそつかな？」

「ちつ、アメトイナ」

「ちい、つて聞こえたよ、あれ、今ちつて聞こえたよ。氣づついた。心に穴があいたよ。悪魔なのに。謝つて、謝つて欲しいな。泉はこいつはほんまにひざいと思いながら、めんどくさいので、とりあえず謝つた。

「ごめん」

「仕方ないな、許してやるよ、といひで今、なにしてるの」「ああ、これで一儲けしようと考えたんだ。この機械はパソコンと

いうんだ。」

「へーこれがパソコンか」

泉はアメトイナにこれから何をするかを説明した。

「わかつたか」

「うん、この機械で、人、生物を生き返すと宣伝して、依頼がきたら、振込みを確認してから、生き返すんだね」

「ああ、そのとおりだ、世の中には生き返したい人はかなりの数がいるからな」

泉は、活動を開始して、一週間が過ぎた。最初は半信半疑の人ばかりだが、一度生き返すと、一気に依頼が殺到した。男はその活動で55兆円を手に入れた。

「さて、これで資金はたまつた。」

「次は何するの。」

「そうだなあ。戦争かな」

それから数カ月後、泉はその日、自分を世間的に自分の存在を殺した。

第一話 蘇り（前書き）

さあ。10月になつてきました。しん棒と粗棒はよく似ています。
さあ、よんでもください。

第一話 蘇り

金があればなんとかなるものだなと泉は思っていた。家族、友人など今の俺には関係ない。泉は世間的に死ぬ前に、島を一つ買った。そこで大規模な工事をし、基地というべきものを建てた。最新の設備などすべて取り入れた建物であった。野菜の人工栽培、水の貯水、家畜の飼育などもやつており、地球が滅びない限り永遠に生きられる。

「すごいね。」

「まあな」

泉も満足している。

「ところでどうして戦争を起こすの」

アメトイナは疑問に思っていた。

泉は答えた。

「別に戦争をしたいわけじゃない」

「じゃあ、なんで」

「まあ、聞けよ。俺はな、人の本性が見たいんだよ。例えばさ、ジヤパンという国があるとするだろ。その国では、警察がいるんだ」

「警察？」

「まあ、簡単いえばルールを破つたものを取り締まる人間だ」

「へー。偉いんだね」

アメトイナは感心していたが、泉が反論した。

「偉くなんかないよ。ただその国の中じゃ力があるんだ」

「じゃあ、みんなルールを守っているの？」

「まあ、大体の人間はおとなしく守っているよ。けれど、それは罰が怖いんだ」

「 Becker?」

泉はあきれていたが、答えた。

「違うよ、覗だ。うーんまあこってみたらお仕置きかな
「例えば」

アメトイナは興味があるようだ。じこつはうなんだろ？。

「まあ、あるせまい場所に閉じ込められるとか、死刑とかだな」

「それじゃ、みんな悪いことをしないからいいんじゃないの？」

「まあ、そういう風にとれることもあるわ。けどな、その力を利用
していいるやからもこるんだよ。おかしいだろ。正義のヒーローが悪
いことしている」

「ふーん」

「まあ、警察などは井の中の蛙つてことだ。まあ、人間の本性をみ
るために、戦争を起こし、秩序をなくすんだよ」

「どうやつて？」

泉はペンを取り出した。

「「」のペンを使つてこらむて面白こと」を発見したんだ

「面白こと？」

「ああ、「」のペンを使つて生き返す「」ができるのは知つてこると
思うが」

「うん、知つてるよ」

「そのあとな、生き返した後、操れることが分かつたんだ。これを
使つてだな。戦争を起こす」

「操れる事は知つてますよ。それどうするの」

「・・・・・・じゃ、ペンの説明の時に教えてくれたらよかつた
んでは」

眉をゆがめながら泉は言った。

「うん、忘れてたし、聞かれなかつたから」

「・・・・・・ほかに伝え忘れたことはないか

「・・・・・・うん。たぶん」

あいまいな返事だった。

「まあいい、それから、何度もいっているだろ。人間の本性を見る
んだよ」

「それで、どうす、んつ」

泉はアナトイナを黙らすため唇を奪つた。

「静かにしてろ、お前は俺の物だ」

アメトイナはぼーっとしながら、うなずいていた。

「黙つて見てろよ。さあ、これから戦争ゲームの開始だ」

泉とアメトイナが島に移動しているころ、世間では死人が生き返る奇跡が起こっていることが

ニュースになつていた。

キヤスターの男が話していた。

「ニュースです。世界では、死人が生き返るという奇跡ともいえる現象がインフルエンザ見たく流行つていい様子です。こちらの事件のはじまりはニューヨークでの怪奇事件、ティラノザウルスが現れたという事件との関係性があるようです」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8517h/>

LIVING A PEN

2010年10月20日11時12分発行